

〈論文〉

アイヌ口承文芸にみられる「史実」と交易

本 田 優 子

目次 はじめに

I 資料の概要

- (1) プロビデンス号来航について
- (2) プロートンの航海日誌について
- (3) 口承文芸資料「異国船来航」について

II 航海日誌と口承文芸の比較

III 口承文芸における交易

- (1) 交易の描写
- (2) アイヌ社会における交易の位置づけ
- (3) 「交易」像を拒否する要素

おわりに

キーワード：アイヌ、アイヌ口承文芸、史実、交易

はじめに

前近代のアイヌの人びとは、自らの歴史を文字で書き残してはこなかった。それゆえ、その時期のアイヌの歴史について考察するためには、和人が残した記録にある程度依拠せざるをえないが、そこには常に、当該期の社会状況に起因する差別的フィルターやバイアスが介在する。それに対し、アイヌ社会に語り伝えられてきた口承文芸には、アイヌの人々の歴史意識が反映していると考えられ、これまでに、多くの先学がアイヌ口承文芸と歴史との関係性について分析を行ってきた。

その嚆矢は、知里真志保の「ユーカラの人びととその生活」(知里1954)である。知里は、ヤウシクル(内陸人=北海道の本島人)とレブシクル(沖の人=オホーツク文化人)との戦争が、yukarのモチーフであり、共通の敵に対する団結を通して同族意識を高揚し、民族の存立興亡を賭して戦ったという歴史的な大事件が成立の背景にあると述べた。この説は大きな反響をよんだが、金田一京助、久保寺逸彦はこれを批判し、英雄叙事詩に対して「歴史的裏付けを認めない」という立場を表

明した（久保寺1969）。

ところが、1970年代に入り、歴史学あるいは文化人類学の研究者たちが、それぞれ想定する時代は異なっているものの、英雄叙事詩のモチーフはアイヌ社会に実際にあった戦いの中で生じたものだと主張した（海保1974、榎森1982・2007、工藤1988、大林1988）。

これに対して、アイヌ語・アイヌ文学の研究者は、口承文芸への歴史の反映は認めつつも、それらの研究にみられる英雄叙事詩利用の方法に対して批判的立場を表明してきた（中川1989・1997、奥田1996）。しかし近年、口承文芸テキストを専門的見地から読み込み分析する作業に基づき、物語と歴史との関わりについての新たな説が提示されつつある（奥田2005、中川2008）。

とはいえ議論はまだ緒に着いたばかりであり、前提となる基礎的作業の一つである口承文芸テキストの資料性の検討については、まだ十分な研究の蓄積はみられない。この点に関しては、筆者もこれまで少なからず問題関心を示してきた。

たとえば、筆者が大きな影響を受けた先行研究として、中川裕「口承文芸に見るアイヌ人と和人との関係」（中川1989）がある。中川はまず、物語に現れる和人描写をいくつかのパターンに分類し、ジャンルと各類型の関係性について分析した。さらに、散文説話では「因果応報」を基本とする物語構成上の制約により、対和人戦争が描かれないのではないかという仮説を提示し、研究史上大きな影響を与えた。

本稿もまた、このようなアイヌ口承文芸と歴史との関係性を考察するために、口承文芸の資料性を探ろうとする試みの一つである。具体的には、18世紀末に北海道に来航したプロビデンス号にまつわる物語として伝承されてきた遠島タネランケ氏の口承文芸「異国船来航」と、艦長ブロートンが実際に残した航海日誌とを比較対照することにより、口承文芸として伝承されてきた「史実」⁽¹⁾とは、どういう姿で立ち現れてくるものなのか考察してみたい。

I 資料の概要

(1) プロビデンス号来航について

プロビデンス号は大英帝国海軍省所属のジョージ3世の持ち船であり、ブロートンはその2代目艦長として北太平洋海域探検航海の途上、1796（寛政8）年9月にアブタおよびエトモに来航した⁽²⁾。翌1797年8月にも再びエトモを訪れている。

(1) 筆者は本稿で、「史実」あるいは「歴史的事実」という語を用いたが、本来これは、保刈実が『ラディカル・オーラル・ヒストリー ―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践―』（保刈2004）で主張したように、「何が歴史なのか」「何をもって事実というのか」ということを問い返すこと抜きに語ることはできないのだということを知覚している。しかし現段階の筆者にはその問題について論じうる力がない。今後考え続けていくべき大きな命題と受けとめている。

(2) この1回目の絵舩停泊中に、ブロートンが湾を「ボルケイノベイ」と名付けたことから、「噴火湾」の名称が今に受け継がれている。

まず、プロビデンス号来航の概要について、後述するブロートンの航海日誌および日本側の資料⁽³⁾に基づき、ごく簡単に述べておく。

〈1回目〉1796（寛政8）

- 9／12 三隻の釣り船でアイヌが訪れる
- 15 アブタの湾内に停泊 アイヌが訪れる
- 16 薪水調達のために上陸 アイヌと接触
- 28 絵鞆へ移動
- 10／1 絵鞆出港⁽⁴⁾

〈2回目〉1797（寛政9）プロビデンス号難破 小型船へ 乗組員34人 再び絵鞆へ

- 8／12 アイヌが訪れる
- 14 日本人が訪れる
- 18 前年の日本人が訪れる 日本の完全な地図をプレゼント
- 23 絵鞆出港

以上が2回にわたる来航の概要である。

ブロートンはこの間、当時の噴火湾沿岸の状況を航海日誌に記録しているが、本稿で考察するのは1回目のアブタ来航に関わる部分である。なお、1回目のプロビデンス号の行程については、多田康之「寛政8年（1796）英国探検船アブタ上陸一考察」（2002）に詳述されている⁽⁵⁾。

（2）ブロートンの航海日誌について

プロビデンス号艦長ブロートンの航海日誌として利用できる資料は、主に以下の3点である。

①『A voyage of discovery to the North Pacific Ocean』1967

艦長ブロートンが残した航海日誌（1804）の復刻版である。

②『改訂 プロビデンス号来航と室蘭 室蘭港湾資料第5集』市立室蘭図書館1969⁽⁶⁾

航海日誌の抄訳および、噴火湾地方への来航部分の日本語訳、関連史料等を掲載したものである。

③久末進一訳『プロビデンス号北太平洋探検航海記』プロビデンス号建造検討委員会1992

航海日誌全編を日本語訳したものである。

本稿では、論点に深く関わる部分については①（以下、原典と記す）と③（以下、『一航海記』と記す）を照合しつつ検証作業を行うが、事件の概要などについては主として『一航海記』に依拠することにした。

さて、このようなブロートンの航海日誌の記述は、どの程度信頼できるものなのだろうか。ブロー

(3) 『新室蘭市史第1巻』（室蘭市市史編さん委員会1891）、『松前町史史料編 第一巻』（松前町史編集室1974）など。

(4) この時、前松前藩主松前道広が藩兵280人を引き連れ出陣したが、到着前にプロビデンス号は出港した。

(5) 虻田在住の郷土史家・多田康之氏による私家本である。公刊されているわけではないが、今回、氏のご好意で拝読する機会を得た。

(6) 1964年に『プロビデンス号来航と室蘭 室蘭港湾資料第1集』（市立室蘭図書館1964）が刊行されており、②はその改訂版である。

トンは自らの航海日誌について、その序文で、次のように述べている。

科学関係者や地理関係者に航海上の知識を与え、さらに世界に関してより広い視野を持つよう努めたいと考えた。従って記述した項目のなかに事実に基づかない出来事は一つもないのは当然である。

しかし当然ながら、当事者によるこのような言を鵜呑みにして、日誌の記述の全てを歴史的事実とみなすことは不可能である。そこには、ブロートンが「無作為」のうちに「事実」とみなした事象、および彼が事実として書き残したいと考えた「作為的事実」が混在しているはずである。たとえば、久末進一は『一航海記』の序文の中で「グリニッジ海事博物館の調査によれば、船長としてはブロートンはあまり人気がなかったという。それは明らかに彼が自負心の強いタイプに人間だったからである」と記している。これもまた主観の強い記述ではあるが、少なくとも日誌の資料性を考察する上で有益な情報ではある。

以上の点をふまえ、本稿では、ブロートンの航海日誌の記述を史実とみなすわけではなく、常に批判的な視点を持つように意識しつつ利用するものである。

(3) 口承文芸資料「異国船来航」について

本稿では、遠島タネランケ氏(1887～1970)⁽⁷⁾による口承文芸「異国船来航」を資料として利用する。遠島氏は、出生地・生活体験地ともに虻田(現洞爺湖町)の女性である。

遠島氏の「異国船来航」に関連するものとしては、管見の限りではあるが、以下のような資料が挙げられる。

①志賀雪湖「遠島タネ唄の伝承ー亮昌寺アイヌ語音声資料」(アイヌ民族博物館1994)

虻田町亮昌寺所蔵の音声資料を、志賀がアイヌ語文字化および日本語訳したものである。

②更科源藏による意識

『虻田町史』(1962)に記載されている。『虻田町史』執筆作業の際に、更科が採録した音声テープも残されており、北海道開拓記念館が所蔵している。意識は『新室蘭市史』(1891)にも転載されている。

③『知里真志保ノート』(CM87・6)における「yukar 遠島タネ(68)」の記載。

日本語訳のみであり、アブタコタンから物語が始まる。

④佐藤知己「伊達地方のアイヌ語方言の言語的特徴」(佐藤2008)

音声資料に基づいてアイヌ語の分析をおこなった論文であるが、巻末に、①の原資料である亮昌寺音声資料ならびに、②の更科源藏採録音声資料を文字化したテキストが掲載されている。亮昌寺音声資料についてはすでに志賀による①があるが、ここでは佐藤独自の聞き起こし作業を行っている。

(7) 生没年は不明とされてきたが、ここでは多田康之氏のご教示に従った(遠島氏の生前の写真および墓碑銘に基づく)。さらに多田氏によれば、茶師野ツルヨ氏口碑、増田又喜氏記録中のルビなどから判断して、遠島は「としま」と読むとのことである。

本稿では、基本的には佐藤が文字化した④の文字テキストに依拠して考察する。佐藤訳では、亮昌寺音声資料が全体で209行なのに対し、更科源藏採録音声資料は336行ある。後者の方には、アブタに到着する前の描写が含まれているだけでなく、個々の描写も詳しく語られていることの反映である。以下、便宜上、亮昌寺音声資料を〈亮〉、更科源藏採録資料を〈更〉と記す。

具体的作業に入る前に、アイヌ口承文芸全体の中での「異国船来航」の位置づけについて、若干述べておきたい。語り手の遠島氏は、この物語について「ユカラ」だと語っている。虻田地方で「ユカラ」と呼ばれる物語は一般的には英雄叙事詩を意味し、たしかにその音声記録からは、英雄叙事詩演唱の特徴である一定の短い旋律およびレナニ（拍子棒）の音がはっきり確認できる。しかしその内容は、一般に知られる英雄叙事詩とは大きく異なっている。もちろん英雄叙事詩のストーリーも一様ではないが、概して超人的な少年英雄を主人公とした物語が多く、架空性・娯楽性が強いとされる。これに対して「異国船来航」は、おそらく「数世代前の先祖が実際に体験したこと」として意識された伝承であり、当然ながら、登場人物もそこに展開される世界も一般的な人間の世界である。従来、このような先祖にまつわる伝承は、「ウパシクマ」と呼ばれることが多い。このような理由から、「異国船来航」は、従来のアイヌ口承文芸のジャンル分類論の一般的な枠内にはおさまらない物語として受けとめられてきた⁽⁸⁾。

以上の点から考えるならば、「史実」を伝える口承文芸の典型として「異国船来航」を用いることは難しい。しかし、「異国船来航」における最も大きなモチーフは異なる民族集団との接触であり、それはアイヌ口承文芸全体においても同じく重要なモチーフとなっていることから、「異民族接触」という要素を切り口とするならば、分析は不可能ではないと筆者は考えた。

Ⅱ 航海日誌と口承文芸の比較

以下、「異民族接触」という観点に立っていくつかの項目を設定し、プロートンの航海日誌（＝A）と遠島タネランケ氏の口承文芸（＝B）を比較検討する。資料は、特別な注記がない限り、Aは久末進一『プロビデンス号北太平洋探検航海記』、Bは佐藤知己「伊達地方のアイヌ語方言の言語的特徴」に拠る。

①プロビデンス号への接触

A：アイヌが和人より先にプロビデンス号を訪れる

9／12 午後に三艘の釣船が訪れた。船の中にいる人々は、頭髮の後を短く切っていて、非常に濃い黒髪、銅の肌色をした人種であった。〔中略〕彼らは1時間ほど我々の所に滞在した後、同じように儀式ばった挨拶をして船から離れていった。

(8) それゆえ、遠島氏の創作ではないかという意見すら耳にしたことがあるが、前述の多田康之氏提供の資料から、この物語にはもう一人伝承者が存在したことが判明した。残念ながら音声記録の存在は確認できないが、すくなくとも遠島氏の創作説を否定することはできるだろう。

9 / 15 西の方には海岸沿いに数軒の家が散在していたが、昼前に居住している幾人かの訪問を受けた。彼らは以前に我々が見たことがある同じ人種の人々であった。

B : 和人から異国船の来航を知らされ、戦いの準備をする。

〈亮〉 u kuwaso or un sisam / u ra ta / Aputa / repkehe ta / hure sisam cip /
会所から 日本人が 浜に 虻田の 沖に 異国船が
u ratki ki na. / ottena / ra ta sap wa / inkar kusu ne na. / ari itak
停泊した 首長よ 浜に降りて みるのだぞ と言った

〈更〉 kuwaso or un tono / Aputa un ottena / neun inkar / Aputa rep ta / hure sisam /
会所の役人は アブタの首長よ どこを見ている アブタの沖に 異国人の
u cip tap ne / kayaratkire / ki wa / okay nankon na /
船が このように 帆を降ろすことを して いるようだぞ

②アイヌとブロートンとの関わりに対する和人の態度

A : 和人はブロートンたちとアイヌとの接触を警戒し妨害する。

9 / 15 We had several visitors from the village, and soon after a Japanese, who immediately sent away our Insu friends (村から数人の訪問者があった。しばらくして一人の日本人が来て、我々のアイヌの友人たちを追い払った⁽⁹⁾)。

9 / 16 幾人かの、土地の原住民 [アイヌ] が伴ってくれていたが、日本人は警戒して彼らにある距離を隔てさせ、我々に近づけさせるようなことはしなかった。〔中略〕幸いなことに、彼らがいんぎんに礼儀を尽くそうとすることを中断させるような日本人はそこにいなかった。

B : 〈亮〉 和人は帰ってしまう

ha yay ru kuwaso or un / kira wa isam / sine sisam ka oararisam
(?)⁽¹⁰⁾ 逃げてしまった 日本人は一人もいなくなった

〈更〉 和人とアイヌと一緒に異国船に乗り込む

a-cipih i / a-sapte ki wa / rep ta paye-an / 〔中略〕 yayan sisam / tuppis /
私達の舟を 私達は出して 沖に私達は出た 普通の日本人が⁽¹¹⁾ 二人
reppis / nep tap ne(?) / hure sisam utar / eparkoyakoya /
三人が 何か 異国人達に どもりどもり話した

(9) この部分は『一航海記』では欠落しているため、原典から引用し、本田の日本語訳をつけた。『改訂 プロビデンス号来航と室蘭 室蘭港湾資料第5集』(市立室蘭図書館1969)では、この部分の翻訳があるが「sent away our Insu friends」の部分で「そのためアイヌ人の友人は出て行ってしまった」と訳している。なお、多田康之氏はこの日本人を上原熊次郎であると比定している(多田2002)。

(10) この部分の佐藤(2008)の日本語訳は「(?)」となっているが、少なくとも kuwaso or un の部分は「会所へ」の意味だろう。志賀(1994)ではこの部分を「hawe an=nu(hu) kuwaso uyrup(hu)」と聞いており、「と私は聞いた。会所のめんめんが 逃げてしまって一人の和人も まったくない」と訳されている。

(11) 更科源蔵の意識では「日本人の通辞」としている。更科はおそらく遠島氏に日本語の意味を確認していると思われるため、彼女自身の訳語の可能性がある。

③アイヌのプロビデンス号への対応

A：丁寧な儀礼的挨拶。

9／12 東洋風の敬意を表す形式の挨拶にふさわしく、前もって厳かに、恭しく、頭を低く垂れてからでないと、我々の船に乗ろうとはしなかった。

村への訪問は拒否。

9／16 村の方へ、こちらから働きかけることについては、彼ら⁽¹²⁾は強く異議を唱え反対したので、この点で何らかのいざこざが起こることを避けるため、断念せざるを得なかった。

B：毒矢や槍を向ける。

〈亮〉 aokay utar nakka / surku aypo / ku ay konitata / a-eyoko kane / 〔中略〕

私達も 毒矢 弓に矢を載せて(?) 私達は狙って

a-koyokoyoko / a-tukan kuni / a-siekimatekka / iki-an awa

私達がねらい続けて 私達が射るぞと 私達が脅した そうしたところ

〈更〉 hokurekure / i surku ay / ku turano / eci-anpa wa / ra ta sap-an⁽¹³⁾ 〔中略〕

さあさあ 毒矢と 弓とを お前達は持って 下に下りなさい

aokay op / hoski kane / para op a-ani / ra ta sap-an 〔中略〕 u cip or un /

私は槍 先に 広い槍を私は持った 下に私は下りた 船へ

para op eyoko /

幅が広い槍でねらう

④薪水の供給

A：プロートンたちは薪や水を自由に入手。和人もそれを認める。

9／16 日の出とともに、飲み水を探すためのボートが遣わされた。〔中略〕いっしょについて来た日本人は、その水が非常に良質のものであるということをさし示した。

9／19 一日中、薪取りや水汲みによる補給作業に時間を費やした。

9／22 陸と海からの風が穏やかになってから、欲しいと思っていた薪水を充分に採取することができた。

B：異国人たちはアイヌに対し水の提供を泣いて頼んだので、アイヌは許可した。

〈亮〉 wakkaekot a-ki kuski na / nekona ne ya / 〔中略〕 easkay ko / tewano /

私達は水不足で死ぬところだ どうかして できれば 今から

wakkaahupkar-an wa / a-ku p tap an na / i-siknure wa / i-korpare yan /〔中略〕

水をもらって 私達はのむよ 命は助けて ください

(12) 日本語訳では、「彼ら」がアイヌと和人のどちらを指しているのか判断が難しいが、原典の記述からはアイヌを指していることが推測できる。

(13) 「sap-an」とあるが、anは人称接辞ではなく、命令形のyanに由来するのではないかと推測される。

ne wa an pe / a-eese wa / ramusinneci

それを 私は了承したので 彼らは安心した

〈更〉 ciskoitak / a-nuci ki ko / 〔中略〕 wakkasak-an wa / tane anakun / kemekot-an
泣きながら言うのを 私達は聞くと 私達は水が無くなって 今や 飢えて
wa / ray-an kuski na / 〔中略〕 wakka tura itasare wa 〔中略〕

死んでしまうところだぞ 水と交換して

hokurekure / wakkata yan ari / iki-an kor / a-utari utan nakka / a-sikasuyre
さあさあ 水を汲みなさいと 私が言いながら 私の部下にも 私は手伝わせた

⑤交換

A : 数珠、小物類、ボタンなど (プロートン側) ⇔ ブドウ、魚 (アイヌ側)

数珠と小物類は交換というよりプレゼントのようである。数珠は原典では「beads」。

9 / 12 数珠やこまごました物を彼らに贈ったが、大変嬉しそうに見えた。

9 / 22 その海岸の原住民は、金属製のボタンと物々交換するためのブドウをひっきりなしに
持ってきた。時折、船のそばを通りかかる漁師に、魚を売ってくれるように説き伏せ
るのだが、そうやってもほんの僅かしか得ることができなかった。

B : 米、酒、菓子、絹、金 (異国人側) ⇔ 水 (アイヌ側)

〈亮〉 wakka kane⁽¹⁴⁾ / tono e amam / tono ku sake / poronno a-kusa / usa keaan pe /
水と金を 殿が食べる穀物 殿が飲む酒を たくさん私達は積んできた 色々なおいしいものを
wakka tura a-utasara kusu henne pirka ruwe he an 〔中略〕 amam newa / sake
水と交換したらどうだろうか 穀物と 酒を

a-utasare / easkay ko / tewano / wakkaahupkar-an wa 〔中略〕 kamyasi utar /
交換 できれば 今から 水をもって 異人達が
wakka rura / usa amam / usa sake / a-uncise ta / rura ki wa /
水を運び 穀物でも 酒でも 私の家に 運んで

〈更〉 amam hemem / sake hemem / kuwasi hemem / saranpe hemem / poronno okay kusu/
米でも 酒でも 菓子でも 絹でも たくさんあるので
wakka a-tasare ko / pirka ki na 〔中略〕 amam tara / sake o sintoko / kuwasi o
水と私は交換すれば いい 米俵 酒の入った桶 菓子の入った
suwop / poronno ta ne / u yap ki wa / 〔中略〕 siyamam ari / kantaci ari /
箱が たくさん 上陸して 米で 糎で
sakekar-an ma
私達は酒を造って

(14) 文脈上、kane (金) がプロートン側のものかアイヌ側のものか判然としないが、おそらく前者だろうと考え、品目の最後に記した。ただし、アイヌ語の kane は金属を意味する。

⑥結末

A：友好的な別れ

9 / 26 岸からいろいろな物を得ることができ、出航の準備をした。

B：入手した品々を村人に分け、米で酒をつくり、神に祈った後、酒宴を開く。

〈亮〉 usa amam hene / sake hene / keraan pe hene a-ukousaraye yakka oro wa /〔中略〕

穀物でも 酒でも 美味しい⁽¹⁵⁾ものでも私は分けても、そうして

sake / kamuynomi / a-ki kustap ne

酒 神への祈りを 私はしたのだった

〈更〉 onnep koraci / eeikaun kane / a-usaraye / okay-an oro wa / a-unihi /

年寄りにふさわしく 多く 私は分配した 私達はいて 私達の家に

a-kousaraye a-usaraye 〔中略〕 sakekar-an ma / kamuynomi-an na.

私は分配した 私が分配した 私達は酒を造って 私達は神祭りをした

以上のように、ブロートンの航海日誌中の記述と「異国船来航」との間には、いくつもの大きな相違点が見られる。もちろん前述のように、航海日誌の記述をすべて「史実」とみなすわけではなく、そこに事実誤認や粉飾が施されている可能性は大いにあるが、少なくとも①～⑥の部分については、ブロートンが意図的に大きく捏造しなければならない必要性を読み取ることは難しい⁽¹⁶⁾。だとするならば、「異国船来航」の方がより大きく「史実」と乖離していることになる⁽¹⁷⁾。

筆者は、歴史的事実として人々に意識されてきたはずの物語が、このような形で伝承されているのは、口承文芸における「異民族接触」の描かれ方に大きな要因があるのではないかと考える。

アイヌ口承文芸には異なる民族が登場するシーンが少なからずあり、なかでも英雄叙事詩では異民族との婚姻関係等もしばしば描かれるが、口承文芸全体を通して圧倒的に多い異民族接触は、和人との交易関係である。すなわち、交易は異民族接触の象徴的表現ともいえよう。

それゆえ、以下、交易という視点から「異国船来航」について考察してみたい。

(15) 佐藤（2008）では「美味しい」という語が欠落しているので、筆者が付け加えた。

(16) たとえば、アイヌの方が和人よりも先にプロビデンス号に乗り込んだという点は特段不自然なことではなく、1643年にオランダのフリース船隊がトカチ沖に停泊していた際にも、同じように二人のアイヌが船を訪れたという記録がみられる（北構1983）。

(17) もっとも、多田康之氏は、ブロートンの航海日誌には砂原へ往返二度上陸した事は書かれていないが、幕府巡検使一行の木村謙次が砂原の庄屋から聞いた話によれば、プロビデンス号は「出帆して又入舟」している。これは「異国船来航」において、虻田上陸の前にも一度上陸して帆柱にする木を伐り、ベンベの首長に追われた事実と符合していることから、タネランケ氏の語り部分にこそ、真実が隠されているのかもしれないと述べている（多田2002）。これが事実とすれば、「異国船来航」には「史実」と乖離した部分だけではなく、「史実」の具体的反映といえる部分が複合的に存在していることになる。しかし、後者についての検証は筆者の任ではないと考え、他の研究に譲ることとした。

Ⅲ 口承文芸にみられる交易

(1) アイヌ社会における交易の位置づけ

まず、アイヌ社会において交易とはどのようなものであったのか、おさえておきたい。

知里は「ユーカラの人々とその生活」の中で、物語に現れる交易について、概ね次のように記述している(知里1954)⁽¹⁸⁾。(1)アイヌの「酋長」は普段は村で狩猟・漁労を営む。(2)彼は時を定めて和人の村に交易に行く。(3)晴れ着を身につける。(4)貯めてあった毛皮その他を背負っていく。(5)和人の村で毛皮その他を差し出し、客となる。(6)数日滞在して大歓待を受ける。(7)様々な品物をみやげにもらって村に帰る。(8)村人を集めて宴会を開き、みやげの品々を分けて権威を高める。

このように交易とは、単に物と物を交換する行為のみを指すのではなく、毛皮を貯めるところから、宴会を開いて周囲の人々にみやげの品々を分けるところまでを意味するといえる。

さらに、そこで展開される知里の交易論で注目すべきは、そのような「交易の事実」とアイヌの世界観における「神々の訪れの観念」とは、符節を合せるように一致しており、これは「神々の観念の一部が、異民族との交易—特に和人交易—という社会経済史的な事実の定期的な繰返しの上に形成されたものであることを如実に物語る」と述べている点である。すなわち、交易とはアイヌの世界観の基盤を形作ったとすらいえるほど、アイヌ社会において決定的な意味をもつ重要な社会的行為だったと知里は捉えていたことになる。

知里のこの説の是非はともかく、交易がアイヌ社会の世界観や価値観の形成に大きく作用している点は疑う余地がないだろう。

(2) 交易の描写

次に、そのように重要な位置を占める交易が、アイヌ口承文芸においてどのような姿で描かれているのか確認しておきたい。交易についてのまとまった報告としては、志賀雪湖「アイヌの口承文芸における「歴史」—交易と漁場労働—」(志賀2003)が挙げられる。志賀は対象を散文説話に絞ったうえで、そこに描かれる交易の姿についておおよそ次のようにまとめている。

1) 交易相手の多くは和人である。

2) アイヌ側の交易品は、「ユッチホキ」「カムイチホキ」と呼ばれる熊や鹿の獣皮であり⁽¹⁹⁾、和人側からもたらされる交易品は、宝物、宝器、刀剣、行器、衣料品、女性の宝物、首飾り、たばこ、酒、米、食べ物などの品々である。

(18) 交易についての知里のこの記述を挙げたのは、モニター氏のご教示によるものである。

(19) 一般に、ユッチホキは鹿の毛皮、カムイチホキは熊の毛皮、と訳されるが、ユッチは広義には熊の意味も有するので、厳格に鹿と熊に対応するのではなく、対句として交易品としての毛皮総体を意味する可能性もあると筆者は考える。なお、アイヌ側の交易品として熊の胆嚢が挙げられている物語もある(中川・大塚1990p. 214)。

3) 基本的には、交易に行って色々な品物を得ることが、何不自由ない生活を実現するための経済活動として描かれており、交易活動は、狩猟というアイヌの生業の上に成り立った対等で友好的な関係として描かれている。

これらの視点から「異国船来航」における描写を捉え返してみる。

1) ここでは、アイヌ (aynu)、和人 (sisam)、異国人 (〈亮〉 repunkur、〈更〉 hure sisam) という3つの異なる民族集団が登場する。これは、アイヌの口承文芸の中では特異な状況であるといえるが、実は、和人は物語構成上さほど重要な意味を持たない。そのことは、和人との関係性が緊張感のない良好なものとして描かれ、〈亮〉の語りに登場する和人の場合などは途中で帰ってしまって姿を現さなくなっていることからうかがえる。したがって、ここでの民族接触の主体はアイヌと異国人であり、多くの散文説話にみられる和人の役割を異国人が担っていることになる。

2) 相手側からもたらされる品物として登場するのは、米、酒、菓子、絹、金である。金を宝器類と考えれば、志賀の挙げた交易品にすべて含まれる。それに対し、アイヌ側が相手にもたらすものは水であり、一般的な物語とは大きく異なる。この点については後述したい。

3) 入手した品々で人々は富み、神祭りを行うことができた。つまり、品物を得たことで描かれる結末もまた、散文説話と酷似する。

このように見るならば、「異国船来航」で描かれる異国人との接触の姿は、口承文芸に登場する一般的な交易の姿に少なからず合致するといえよう⁽²⁰⁾。

すなわち、たとえ歴史的事実と意識されている伝承であっても、異民族接触のようにアイヌの口承文芸における重要な要素に関わる場合には、その象徴的表現としての交易の姿がまず援用され、その一般的な描き方へと傾斜させる力が強く働いているのだと筆者は考える。そして、このような作用こそが、「異国船来航」とプロトンの航海日誌との齟齬をもたらししている最大の要因といえるだろう。

(3) 「交易」像を拒否する要素

それでは、「異国船来航」は、完全に交易の物語として構成されているのかといえば、そうではない。なぜならば、そこでは、品物をやりとりする行為に対し「交易」を意味するアイヌ語「ウイマム」が用いられていないのである。

この点に関わる重要な指摘を行ったのが児島恭子である。児島は2007年、札幌大学ペリフェリア・文化学研究所主催のシンポジウムおよび公開講座において、アイヌ口承文芸に現れる交易に関連する語句を詳細に調査した報告をおこなった(児島2008)。すなわち、ウイマムとは日本語の“うみまみえ”のアイヌ語化したものだとする金田一京助の説に対する再検証の必要をも提起しつつ

(20) この他にも、たとえば、〈更〉では、異国人に対する「sapa ka ta / kap paskur kesupi / eotara apkor / okay 頭の上に カラスの足が 突きだしたかのようなものである」という描写が見られる。これは一般的には「ちょんまげ」を表す描写であり、敵対する存在としての和人を描写する際に用いられるのだが、「異国船来航」においては、和人ではなく、毒矢を向けた相手である異国人の描写として用いられている点が興味深い。

(p. 15)、「ウイマムというのは英雄詞曲⁽²¹⁾の語彙」(p. 17)だと述べ、「親の代にかつて行われていた交易があって、そうして今の英雄がそれを復活させる。交易をするということはアイヌの理想的な平和な満ち足りた世界とつながっているという、それが英雄詞曲の世界」(p. 46)だと指摘した。さらに、神話の世界ではイラウケトッパ (商売する⁽²²⁾)、散文説話の世界では、レラ (～と交換する)、タサレ (～を～と交換する)、ホッ (～を買う) などが、品物のやりとりに関わる基本語彙だとしている。

ウイマムが英雄叙事詩の語彙であるという点には、散文説話に登場するウイマムという語の多さから考えても、いまだ補足説明あるいは概念規定を行う必要があるように思えるが、交易の姿をアイヌ語の違いから分析するという視点には大きな示唆を得た。

翻って「異国船来航」にみられる語彙を挙げるならば、〈亮〉では、utasare (～を交換する) 2回、wakkahok (水を買う) 1回、wakkaahupkar (水をもらう) 1回であり、〈更〉では、itasare (～と交換する) と tasare (～を～と交換する) が1回ずつ出現する。すなわち、「交換する」という意味のタサレを含む語が多くを占め、ウイマムは登場しない。

しかし、貨幣が流通しなかったかつてのアイヌ社会において、交易は基本的には物々交換であり、ウイマムもまた物々交換であったはずである。だとすれば、ウイマムとウタサレ、あるいはレラ、ホッなどの語⁽²³⁾にはどのような意味の違いがあるのだろうか。

たとえば、ウタサレ、レラ、ホッ等の語は、単独の行為として登場する場合もあるが、いずれも、ウイマムに含まれる特定の行為を表す動詞として用いられる場合がある。たとえば、児島が挙げている例ではあるが、上田トシ氏の「レブン交易に出かけたオタサム人の話」には、“交易に行って (uymam)、色々なものを交換し (tasare)、着物でもなんでもたくさん買って (hok)、そうして舟に積んで酒でも米俵でも交換して (tasare) …” という描写がある。このように、ホッやタサレという行為がウイマム全体の中に包括される例は、しばしば見受けられる。また、ホッ、タサレ、レラが入れ替わっても、大きな変化はない。

しかし、ウイマムという語に限っては、それらに無条件で入れ替わることはできないというのが、筆者が口承文芸を一定程度通覧して得た結論である。以下の例について考えてみよう (下線は本田)。

① 鳩沢ワテケ氏 〈散文説話〉「嫁いびりする息子夫婦の話」(早稲田大学語学教育研究所1988)

aonaha patek, sumiyaki ne kor an wa , ora amam ka rera, usa oka akor rusuy pe, rera wa
〔中略〕 sumi eiyok wa, usa amam usa akor rusuy pe rera wa

(21) 英雄叙事詩と同義。メロディがある点を重視し、児島は詞曲という語を用いているとのこと。

(22) 地元で働くのではなく出稼ぎに行くというような意味も持つ語であるが、ここでは久保寺逸彦『アイヌ語・日本語辞典稿』(久保寺1992)の意味を挙げた。

(23) 自動詞と他動詞が混在しており、比較検討する語としては必ずしも適当ではないが、口承文芸中からの引用であるため、そのままの語形にしている。

(お父さんだけで、炭焼きをしていて、そして米も交換で持ってきたり、いろんな欲しいものを、交換で持ってきて〔中略〕炭を売って、米だのいろいろ欲しいものを、交換して)。

②同上〈散文説話〉「私は石狩に住む女です」(同上1985)

harkika akar wa tono or un ase kor amam arera wa 〔中略〕harkika-karan wa aeyyok tono or un ase kor , usa tono e aep pirka aep atasare wa ae kor anan

(縄をなつて、和人のところへ背負って行つては、米と交換して来て、〔中略〕縄をなつて、売ります。和人のところへ背負って行きますと、いろいろな、和人が食べる食べ物、上等な食べ物と交換して、それを食べながら暮らしていました)。

①の例は和人の炭焼きが炭を売って米などと交換するという文脈であり、レラ、エイヨクという語が使われている。和人と和人の取引なので、ウイマムが使われないのは当然といえる。しかし②の事例は、アイヌの主人公が和人のところへシナ縄を持って行くという設定なので、ウイマムが用いられても良いような状況である。しかしここでも、レラやエイヨクの他、セ、タサレという語が用いられているだけで、ウイマムは使われない。その他、多くの物語を通覧してみたところ、ウイマムという語は、一定の条件を備えた場合でなければ、用いられないということが確認できた⁽²⁴⁾。

それでは、どのような場合にウイマムが使用されるかといえ、前述の知里の記述にみられるような一連の工程が存在する場合である。さらにここでは、その中でも最も重要な要素が、チホキ cihoki であると指摘しておきたい。チホキとは、金田一によれば「われわれの売買するもの」「商品」が原義であるが(金成マツ・金田一京助1959p. 433)、多くの場合は前述のように「カムイ チホキ ユク チホキ (熊の皮、鹿の皮)」として登場する。

このチホキを取引する行為は、確実にウイマムと呼ばれている。逆に、ウイマムという語で示される行為が描写される場合は、たとえチホキという語が物語中に出現していなくとも、文脈上、そこでの取引品目がチホキであることが感じられるような状況にある⁽²⁵⁾。

次に、そのチホキは必ずアイヌ自身が持って行っているという点が重要である。かつてのアイヌ社会における交易活動には当然、相手がアイヌの集落を訪れるケースもあったはずだが、口承文芸に描かれるウイマムは、全てアイヌ側が出かける姿として描かれている。その際、海を渡って交易する場合と、河川を下って行ったところで交易する場合があり、前者は松前における城下交易も含む自由な渡海交易の姿を、後者は商場知行制下の姿を彷彿とさせる。

以上の点をまとめるならば、ウイマムとは、狩りをして交易品としての毛皮を準備し、それらを舟に積んで出かけ、異なる民族集団と取引を行うという、一連の工程を包括した総体的概念であり、

(24) たとえば田村すず子は『アイヌ語沙流方言辞典』の中で、「rera」の訳語を「…を交易で手に入れる」としており、用例の文章として①のアイヌ語を載せ、「交易で米も手に入れ」と訳している。しかし、uymam と rera に意味上の区別があるとするならば、今後は日本語に訳する場合にも一定の注意を払う必要があるだろう。

(25) とはいえ例外もある。たとえば、『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』(久保寺1977)の「神謡8」「神謡9」は、自叙神である熊神への送り儀礼をおこなうために飼い主が「tono-ko uimam」に出かけるという設定である。この場合、チホキの語が見あたらないのは、事前にチホキを準備するということが物語構成上不自然だからだろう。

そこには、交易品生産に対するアイヌの能動性・主体性が潜在している。このような、交易に対する肯定的で主体的な意識が多くの物語の基層をなしている点に、アイヌ社会の歴史意識を読み取ることができるといえよう⁽²⁶⁾。

さて、このような点をふまえるならば、「異国船来航」にウイマムという語が出現しないのは当然といえる。アイヌが主体的に出かけて行った取引ではなく、しかもアイヌが異国人に提供したのは水であって自らが生産したチホキではない。それゆえ、物語中の様々な要素が交易に関わる描写に置き換えられ、交易をベースとする異民族接触に近い構成に変化したとしても、その行為自体をウイマムとみなすことはできないのである。

しかし、さらに踏み込んで指摘するならば、たとえウイマムとみなさない取引ではあっても、そのことによってもたらされた富で神祭りをを行い、調和のとれた平和な世界を獲得するという結末は、まさに児島の言う「英雄叙事詩的な交易世界」だといえ、大きな枠組みにおいては、やはり交易の物語として成立しているといえるだろう。

以上のように、たとえ「史実」として語り継がれてきた物語ではあっても、口承文芸における重要なモチーフに関わる場合は、個別性や具体性は捨象され、典型的描かれ方へと再構成されている点に、口承文芸の資料的特徴があるといえよう。

おわりに

以上、述べてきたことを簡単にまとめてみたい。

ブロートンの残した航海日誌を参照しながら「異国船来航」を分析するならば、歴史的事実を反映していると語り手に意識されている口承文芸においても、その内容は多くの点で「史実」とは異なっている。なかでも異民族接触、とりわけ、異なる民族集団からなにかがもたらされるという状況の描写は、物語世界にも繰り返し登場するウイマム、すなわち交易の像に大きく傾斜しており、この点が、航海日誌と「異国船来航」の間の齟齬をもたらししているといえる。

このように、異民族接触の像が、一般的な口承文芸に登場する交易像に収斂されていくのは、知里真志保が述べているようなアイヌ社会における交易の重要性に拠るものだと、筆者は捉えている。

とはいえ、物語に登場する交換行為がすべてウイマムとみなされるわけではない。ウイマムと表

(26) 本稿の論点からは大きく逸れるが、代表的な交易品であったはずの鮭が、物語世界において交易品として現れない理由もまた、交易品生産における「主体性」を尺度とすることにより、見えてくる部分があるのではないだろうか。たとえば、シャクシャインの戦い以降、アイヌ側の交易品は干鮭から生鮭へと変化した。それまで、河川上流部で捕獲した脂身の少ない鮭をアイヌ自身が加工保存していた段階では、交易品としての鮭に対するアイヌ自身の主体的な関わりがあったが、生鮭供出の場合は、単に捕獲する作業を担うにすぎなかった。さらにその後の場所請負制の時代に至っては、志賀(2003)が挙げているような過酷な漁場労働の描写も相俟って、主体的に生産する交易品としての鮭のイメージは完全に消失したのではないだろうか。ブロートンの航海日誌にアイヌから魚を入手している記述があるにも関わらず、「異国船来航」に魚が登場しないのも、そのような点が遠因となっているのかもしれない。

現するためには、アイヌ自身が生産したチホキの存在および、アイヌ自身が取り引きに出かけるといふ能動性が不可欠なのだと考えられ、まさにその点に、アイヌ民族が口承文芸の中で伝承し続けてきた主体的歴史意識を読み取ることができる。

アイヌ口承文芸を歴史資料として利用するための資料性の検討については、今後、様々な研究の蓄積が期待される。筆者もまた、ささやかな試みを重ねてゆきたいと考えている。

最後に、このような稚拙な論に対し、いくつもの重要な指摘を行い修正の方向性を示してくださったモニター諸氏に感謝するとともに、遠島タネランケ氏に関する貴重なお話をきかせてくださったタネランケ氏のご遺族、ならびに数多くの重要な情報を提供してくださった多田康之氏に、心からお礼を申し上げたい。

引用文献

William Robert Broughton

- 1804 『A voyage of discovery to the North Pacific Ocean』（1967復刻版）。

榎森進

- 1982 『北海道近世史の研究』北海道出版企画センター。

- 2007 『アイヌ民族の歴史』草風館。

大林太良

- 1988 「アイヌのユーカラとその歴史的背景」川田順三他編『口頭伝承の比較研究〔4〕』弘文堂。

奥田統己

- 1996 「歴史研究の資料としてのアイヌ口承文芸」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第2号。

- 2005 「歴史研究とアイヌ口承文芸(2)」札幌大学ペリフェリア・文化学研究所『アイヌの歴史と物語世界』。

海保嶺夫

- 1974 『日本北方史の論理』雄山閣。

北構保男

- 1983 『1643年 アイヌ社会探訪記—フリース船隊航海記録—』雄山閣出版。

工藤雅樹

- 1988 「古代蝦夷の社会—交易と社会組織」『歴史評論』434。

久保寺逸彦

- 1969 「アイヌ文学」アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社。

- 1977 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店。

- 1992 『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会。

児島恭子

- 2008 「アイヌ口承文芸からみる交易」札幌大学ペリフェリア・文化学研究所『アイヌの交易世界』。

志賀雪湖

- 2003 「アイヌの口承文芸における「歴史」」歴史科学協議会『歴史評論』639、校倉書房。

市立室蘭図書館

- 1969 『改訂プロビデンス号来航と室蘭 室蘭港湾資料第5集』。

多田康之

- 2002 『寛政8年（1796）英国探検船アプタ上陸—考察』私家本。

田村すず子

- 1998 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。

知里真志保

- 1954 「ユーカラの人びととその生活」（『知里真志保著作集三』平凡社1973）。

中川裕

1989 「口承文芸に見るアイヌ人と和人との関係」北方言語・文化研究会『民族接触—北の視点から—』六興出版。

2008 札幌大学ペリフェリア・文化学研究所主催総括講座での配布資料。

中川裕（校訂）大塚一美（編訳）

1990 『キナラブックロ伝 アイヌ民話全集 1』北海道出版企画センター。

久末進一（訳・編著）

1992 『プロビデンス号北太平洋探検航海記』プロビデンス号建造検討委員会。

保苅実

2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー —オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践—』お茶の水書房。

北海道教育委員会

1999 『平成10年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』18。

室蘭市市史編さん委員会

1891 『新室蘭市史第1巻』（1891）。

早稲田大学語学教育研究所

1985 『アイヌ語音声資料 2』。

1988 『アイヌ語音声資料 5』。

松前町史編集室

1974 『松前町史史料編 第一巻』。

“Historical evidence” and the trade in Ainu oral literature

HONDA Yuko

Summary :

Ainu oral literature becomes important material when discussing Ainu history. For this reason, many scholars in the past have explored the relationship between Ainu oral literature and history. Studies, however, have not yet accumulated enough. Having aware of this situation, this paper attempts to prove the role and the characteristics of Ainu oral literature as important materials in the understanding of Ainu literature.

Specifically, the studies compared the ways in which “historical evidence” was described in two different materials: one is “Ikokusen Raiko” (“The arrival of the foreign ship”) by Toshima Taneranke which has been passed down from generation to generation as a story concerning the arrival of the foreign ship Providence in Hokkaido at the end of the 18th century, and the other is its ship’s logbook written by captain Broughton. In doing so, this paper focuses on the element of “the contact between different ethnic groups” as an important motif both in general Ainu oral literature and “Ikokusen Raiko.”

The study confirmed that there are a number of great differences in the description of Ainu and ethnic Japanese in Broughton’s ship’s logbook and “Ikokusen Raiko.” The author examined how the “trade,” the symbolic representation of “the contact between different ethnic groups,” has been portrayed, considering why such story, which has been passed down as “historical evidence,” was narrated in a particular way and explored its reason why “the contact between different ethnic groups” was described in Ainu oral literature.

The study found that the state of the contact between the British and Ainu seen in “Ikokusen Raiko” matches with the description of the trade in oral literature. Although the oral literature was considered as historical fact, in case that there concerns an important element in Ainu oral literature such as the contact between different ethnic groups, the form of the trade was first described symbolically and then the story was tempted to be narrated in the more general terms.

On the other hand, “Ikokusen Raiko” was not fully structured as a story of the “trade,” for a word “uymam,” meaning trade, was not used. uymam means a series of a production process from producing fur, loading them onto a ship, going out and trading with different ethnic groups, to getting goods in exchange, a process based on the independence of Ainu. In this regard, “Ikokusen Raiko” is not the story of trade. It is, however, formed as a story of the contact between different ethnic groups as a major framework of trade, and in this point, the studies found the characteristics of materials in Ainu oral literature.

key words:

Ainu, Ainu oral literature, historical evidence, trade